徳山四国八十八ケ所

四国八十八ケ所とは、四国にある弘法大師空海が開いたといわれる霊場八十八ケ所をいう。創設は弘仁６年（８１５年）弘法大師４２歳のころといわれ、これを巡拝することを四国遍路といい、文化・文政年間（１８０４年～１８２９年）ごろが巡拝者が最も多くおびただしい人数であったようである。

当時、四国遍路するには、今の海外旅行をするぐらい日数と経費がかかったので、四国八十八ケ所をもした地方霊場が多く祭られるようになり、秋穂、桑ノ山の霊場が天明期（１７８０年代）に勧請され、その他は天保期以降の江戸後期から明治にかけて多く勧請されている。

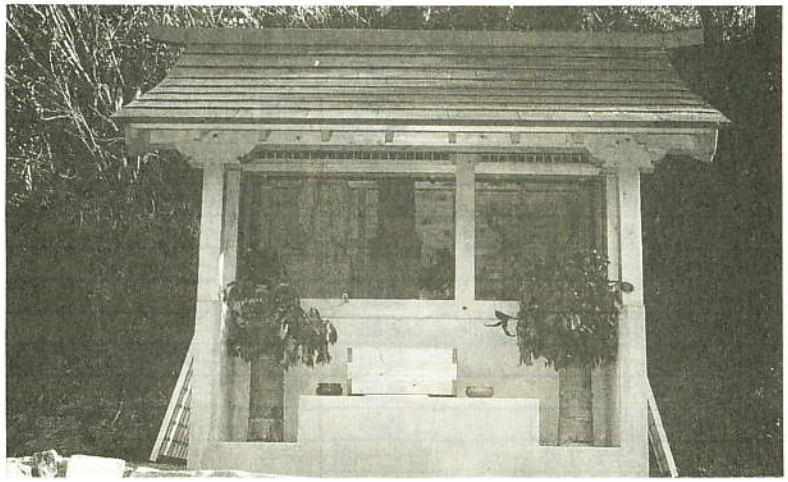
徳山四国八十八ケ所は、霊場由来記によると、遠石千日寺丘に勧請したが、のちに無量寺（徳山駅前旧佐渡町）に移設し、明治になって浅田善七氏・不破勝益平氏らが徳山近在に勧請配置したものである。

徳山四国八十八ケ所を勧請した時期は、高尾山中腹にある三社権現の裏面に彫ってある文に、四国霊場を天保６年（１８３５年）に千日山へ勧請安置し、嘉永２年（１８４９年）に無量寺へ移設したとあり、徳山市内に配置した時期は、明治１６年～明治１８年ごろといわれている。

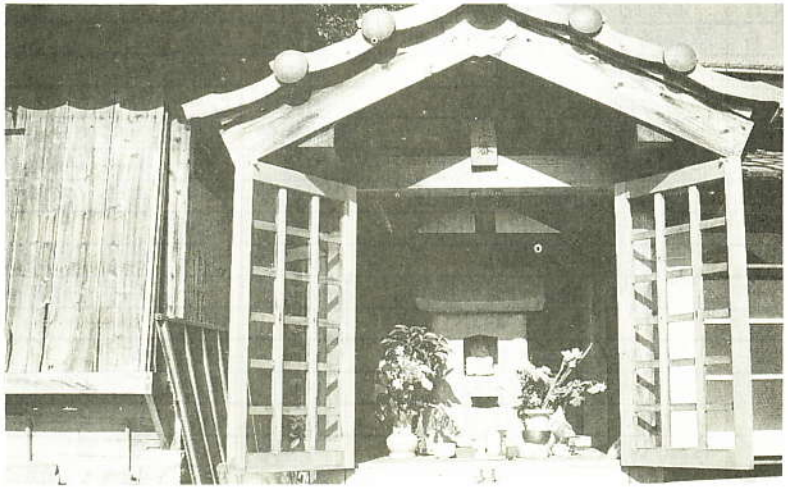
浅田善七氏・不破勝益平氏はともに文政３年に辻町で生まれ、家も近く幼なじみだったようであり、浅田氏は浅田善司氏の先祖で徳山村初代村会議員を明治１０年～１７年ごろまで勤め、２０年に６７歳で没し、不破勝氏は徳山大学前学長不破勝敏夫氏の先祖で、小学校の教員を明治１４年ごろまで奉職していた。

発願の趣旨は、第一に信仰、第二は巡拝により健康の保持と親睦

を深めることにあったと言われている。徳山四国八十八ケ所札所を市内に配置するには、土地所有者の承諾が必要であり、費用調達の問題もあるが、浅田氏、不破勝氏らの信仰心と人望により、多数の方々の協力を得て配置の大事業がなし遂げられた。



六十七番大興寺（小野）



五十五番金剛院（西一ノ井手）